

トマトときゅうり

トマトときゅうりは、施設栽培における代表的な野菜であり、同じような生産構造を有している。実際、施設栽培ではトマトを主体に、連作障害をさけるため、きゅうりを取り入れる経営をおこなっているところが多い。

きゅうりは、かつて施設野菜の代表として、農業粗生産額でもトップの地位にあった。しかし、平成6年にはその地位をトマトに譲り、年々減少傾向にある。トマトときゅうりに対照的な変化をもたらしたのは、調理の食材としての需要要因にあると考えられる。きゅうりは、家庭でも漬物などで食されることが主体であったが、食生活の洋風化の進展に伴い需要を減少させることとなった。

一方トマトは、サラダや調理の食材として用途が広く、周年需要が見込まれる野菜として産地も広がっていった。かつては露地栽培が主体で夏場を中心に出荷されていたが、施設栽培の普及により周年出荷されるようになった。現在はむしろ冬春トマトが主体で、需要の伸びが期待されて

いる。このため、生産者のみならず、種苗会社、施設園芸業者、食品企業、外食事業者、流通関係者などの関心も高く、トマトビジネスはいろいろな観点から注目されている。

きゅうりは、事業所給食や外食産業などで浅漬け需要が見直されてきているが、需要を拡大する取組みが急務といえよう。しかし、調理食材としての利用範囲が限られることがネックとなっている。

トマトときゅうりは、農産物の需要要因の重要性を象徴している。需要動向に如何に対応していくか、実需を起点とした生産構造をいかに確立していくかという、農業の今日的課題を提起しているといっても過言ではない。「食」をめぐる環境変化と農産物の中長期的需要動向を視野に置きながら、営農計画を組み立てる視点が求められている。

(鴻巣 正)

トマトときゅうりの主要データの比較

	トマト	きゅうり
農業粗生産額 (01年、億円)	1,904	1,461
10 a 当たり農業所得 (01年産、千円)	(大玉) 965	1,152
販売農家数 (00年、戸)	59,542	73,444
作付面積 (01年産、ha)	13,600	14,800
施設面積 (01年産、ha)	7,990	6,730
1人あたり支出金額 (01年、円)	1,923	1,153
19年度需要見通し (冬春、千トン)	699~717	376~396